

パーキンソン病 up-to-date

特集にあたって

パーキンソン病は、脳内の神経細胞の変性によって振戦、筋強剛、運動緩慢等の運動症状だけでなく自律神経症状、精神・認知症状等の非運動症状も合併する全身性疾患であり、超高齢社会に突入した本邦において患者数は増加傾向にあるといわれている。経過は長期にわたり、症状の進行に伴って経済的な問題、介護者の身体的・精神的負担が生じやすいこともあり、本邦では難病の一つに指定されている。

いまだに原因は不明で、根本的治療方法は未確立であるが、数多くの研究の積み重ねにより、近年、パーキンソン病の診断や治療方法は着実に進歩している。それは、リハの分野においても同様であり、症状把握と介入の根拠はより確実なものになってきた。

また、パーキンソン病が長期の経過をたどるため、専門病院における介入に加え、生活期・終末期を支える地域・在宅でのかかわりの重要性もいっそう増している。しかも、近年の改革により、パーキンソン病当事者を支え続けるための社会保障制度は少なからず変更され、その変更が当事者と家族の生活に変化をもたらしている。

このような背景から、本特集「パーキンソン病 up-to-date」を企画した。各著者には特に、近年の変化について、加えてそれでも残る課題について言及していただくようお願いした。

パーキンソン病にかかわる OT にとって、よりよい臨床実践のヒントとしていただければ幸甚である。
(高畑進一)

企画担当

高畑進一 (大阪府立大学, OT)

江藤文夫 (国立障害者リハビリテーションセンター, 顧問・医師)

澤 俊二 (金城大学, OT)